

「君の臍臓をたべたい」

この言葉を、最初は本の題名程度にしか思っていませんでした。ですが、読み終わった後にもう一度見てみると、とても心に響きます。

ある日、高校生の【僕】は病院で「共病文庫」という本を拾います。「共病文庫」はクラスメイトの山内桜良が綴ったものなのですが、そこには天真爛漫でクラスでも人気の彼女が臍臓の病気で余命幾許もないと記されています。「君の臍臓をたべたい」は、彼女の家族以外誰も知らないこの秘密をきっかけに【僕】と桜良が交流するお話です。

まず、私が素敵だなと思ったのが、桜良と【僕】の関係性についてです。

この本では、序盤に桜良が「君の臍臓をたべたい」と口にします。臍臓が悪い彼女は、昔の人はどこか体に悪いところがあると動物のその部分をたべていたということを知り、【僕】に「君の臍臓をたべたい」と言ったのです。ですが、この「君の臍臓をたべたい」という表現は終盤にも現れます。【僕】と桜良は、正反対の人間だと作中で何度も二人が言います。桜良は天真爛漫なクラスの人気者、【僕】は静かで他人に興味を持たない。ですが、二人とも互いに憧れを抱いています。他人と心を通わせることで魅力を作り出す桜良と、自分自身で魅力を作り出す【僕】。正反対の二人は互いに憧れ合って、「君の爪の垢を煎じて飲みたい」という言葉を送ろうとします。ですが、二人は自分たちにぴったりの言葉を見つけます。それが「君の臍臓をたべたい」。これを読んだとき、鳥肌が立った気がしました。この二人と同じように、私たちにも魅力や長所があります。そして、二人と同じように、私たちも誰かに憧れます。私と妹も、対照的な性格をしています。妹は怠惰な私と違い、人のために動ける優しい性格です。私にはまねできないと思っています。妹の素敵な長所だと尊敬していますが、羨ましくなることもあります。きっと妹もどこか私の長所に惹かれる部分があるのだと思います。私も二人のように純粋に互いの長所を尊重し合える関係性を大切にしていきたいです。

次に、印象的だったのは、この本で描かれる死生観についてです。

【僕】と、あと一年ほどしか生きられない桜良は、作中で何度も桜良の病気や死生観についての会話を交わします。その中で、桜良が口にした生きることにに関する言葉に、私は何度も「確かにな」と思いました。例えば、通り魔事件の話をしているとき、桜良は「普通に生きているみなはさ、生きるとか死ぬとかにあんまり興味ないでしょ」と言います。それを聞いて私は、確かに普段死を意識して生きていないなと思いましたが、まるで生きていることが当たり前かのように、私たちは日々を過ごしています。でも桜良は違います。余命を宣告されて、毎日を「生きている」と感じながら生きるようになった彼女の言葉はとても重く、説得力があります。そして、私たちにも死ぬ可能性や、今日過ごしている「当たり前」が崩れる可能性があり、今日一日生きていることが奇跡的で素晴らしいことだと思わせてくれます。私にも、今の医学では治せない持病があります。私が病気に罹ったのは小学二年生の頃です。それまでは世間一般の小学生と変わらない生活をしていました。ですが、そんな私も何の予兆もなく急に病気に罹りました。だから、誰にでも今日過ごしている「当たり前」が崩れる可能性があるのは私も身をもって知っています。桜良は私たち一人ひとりの生き方についてもとても興味深い話をしてくれていて、自分の選択を大事にしよう、日々の生き方を見直そうと思える、大切な言葉が沢山詰まっています。

そして、この本を読んで一番驚いたのが、桜良がニュースで話題になっている通り魔に刺殺されたことを【僕】が知った場面です。この話を読み、桜良の「余命」と聞いたとき、余命までは生きられる、そう勘違いしてしまった自分がいました。でも、余命というのはあくまで予測であって、その日まで生きられるという保証ではありません。誰しもの明日が保障されていないというのはこういうことだったのかと、私はこの場面を読んで驚きました。桜良が言っていた「死を意識する」ということさえちゃんと理解できていなかったんだということもこのとき理解しました。明日が保障されていないのはみな同じで、だからこそ一日一日を悔いなく生きなければならないのだと改めて思います。

私はこの本を読んで、生きるとは全員に平等で、とても尊いことだと思えました。魅力も性格も違う私たちが、同じ日々を平等に生きている。それがどれほど凄いことで、尊ばれなければいけないことなのか、この本を通して知れた気がします。【僕】と桜良が教えてくれた「生きること」の意味と尊さを忘れずに、一日一日を過ごしたいと思います。